

群馬建協 避難所の「3密回避」

新型コロナウイルス禍において

各地で豪雨災害が頻発する中、災害避難所の「3密」対策が喫緊の課題として浮上してきた。群馬県建設業協会（青柳剛会長）は9日、避難所向けに考案した段ボール製の間仕切り『KAMIKABE』



昭和村で実施した組み立て訓練

県内で組立訓練スタート

段ボール製間仕切り「KAMIKABE」

〈かみかべ〉の組み立て訓練を昭和村で初めて開いた。県内すべての市町村で順次実施し、地域を守る建設業が提案する備えの形の普及・定着を急ぐ。

群馬県建設業青年経営者部会のメンバーが中心となって、各自治体の職員らに組み立て方法をレクチャーする。昭和村での訓練には約30人が参加し、堤盛吉村長も視察した。

KAMIKABEは1辺2・1メートルの正方形で、高さは1・5メートル。ユニットの組み合わせで、居住空間を拡張することもできる。組み立てにテープや金属は不要で、設置時間は大人3人で20分ほど。仮住まい生活の質を高めるデザイン性や使い勝手にもこだわった。

群馬建協は6月に、完成したKAMIKABEをお披露目した。県内では既に、複数の自治体が導入を進めている。群馬県建設事業

協同組合を窓口にも、一般購入の申し込みも受け付けている。価格は1ユニット1万1000円（税別・送料別）で、5ユニット以上から発注できる。

群馬建協では、県内12支部の建設会館に分散備蓄し、災害時の状況に応じて近場で必要量を融通し合う方式を採用する。この枠組みに自治体なども参画してもらったことで、スピード感も含めた災害対応組織力の向上を図る。

避難所で使う段ボール製品は受注生産も少なくなく、すぐに必要な場合に納入が間に合わないケースもある。そのためにも、文字通り備蓄が有効な手段となる。

青柳会長は「同じような環境下にある人たちが手を結ぶことが大切。特定の個所にまとめて備蓄するのではなく、少量ずつでもたくさんの個所に配備するべき。運搬や設置では、それぞれの地域で活動するわれわれ建設業のネットワークと機動力が生きてくるはず」と話している。

段ボール製間仕切り備蓄

昭和 昭和村は県建設業協会が開発した段ボール製間仕切り「KAMIKABE（かみかべ）」を災害用の備蓄品として採用することを決め、協会と合同で組み立て訓練を行った＝写真。

訓練は県内の自治体で初めて。協会は、沼田市など備蓄を検討している他の7市町村を中心に、順次訓練を実施して普及を目指す。昭和村は30セットを購入し、地元の建設会社から寄付された26セットと合わせて村内の避



難所などに配備する。

組み立て訓練は村公民館で行われ、村職員や消防団員、協会員ら約30人が参加した。堤盛吉村長は「今後の避難は、新型コロナウイルス対策も含めて対応が必要だ」と訓示。協会の説明に従い、村側の参加者たちが段ボールを折り、切れ込みに合わせて組み立てていき、1セットを20分ほどで完成させた。

KAMIKABEは厚さ3ミ、高さ約1.5ミの段ボールをびょうぶのように折り曲げた壁を4枚組み合わせ、2.1ミ四方の間仕切りにする。避難者のプライバシーを守り、新型コロナウイルス対策として「3密」を避けられると期待されている。1セット1万1000円。
(渡辺隆治)